

小勝山の鳩と猫

千葉県市原市 守宮 槐

小勝山団地の一番上のバス停で、コミュニティバスから降りた川辺春美さんは、思わず大きな溜め息をついた。両手の買い物バッグはずしりと重い。これを持って暑い中を、もう少し先の自宅まで、坂道を登って行かねばならない。今日は久しぶりに297号線沿いのスーパーまで行ったので、つつい多めに食材や日用品を買ってきてしまった。

「大丈夫！ このくらい、良い運動だから！」

自分に言い聞かせるように気合を入れて、さてと足を踏み出した。

夫が生きていてくれた時は、何を買おうと彼が車で運んでくれた。分譲団地のほぼ頂上に購入した我が家は、若かった当時は展望の良さを喜びこそすれ、別段不便とも思わなかったものだった。夫は勤務先の五井の会社まで車で通勤し、若く活発だった春美さんは、小勝山の隣りの光風台団地のスーパーくらいなら、軽く二往復するくらいの元気があった。子供達も団地を飛び回って大きくなった。学区は、団地の頂上付近で分かれていて、北側は光風台小学校、南側は寺谷小学校だったので、息子二人は寺谷小の方に世話になった。のどかな環境でのびのびと育った息子らは、あつという間につっさら棒な大人になって家を出ていった。今は二人

共家庭をもつて、なんとかやっているといるらしいけれど、ついで訪ねてくることはない。

その後、夫との二人暮らしが長く続いた。このまま仲良く添い遂げるのだと、春美さんは思っていたが、去年夫が急死してしまった。そして初七日を過ぎて数日という頃に、見知らぬ女が押しつけてきた。なんと夫は、十年間もその女（チンケなスナックのママだったけど）と、浮気をしていたというのだ。女は厚かましくも、夫とは結婚することになっていただけの、少しで良いからこれまでのお世話料をくれたのと、春美さんに迫った。それがかえって、生きる気力を失いかけていた春美さんの闘志に火を点けて、色々と修羅場を繰り広げた結果、見事女を退散させたのだ。まあ、今になって思うと、女との闘いのおかげで夫を失った悲しみから立ち直れたような気がする。だから、その女には少し感謝もしているのだ。

女の件がようやく片づいた頃、今度は仲が良い兄弟だと信じていた我が子二人が、春美さんの今後の介護の押し付け合いを始めた。そのくせ夫の遺産はきつちりと、法定相続分を要求してきた。春美さんはその要求を全て飲んだ。だから彼女の取り分は、ほぼ自宅のみで、夫名義の預貯金は殆どを長男次男がきつちり分けて持つていってしまった。札束を目の色変えて数えていた嫁たちの浅ましい姿を思い出すと、春美さんは今でも血圧が上がって来るのだった。嫁達に怒りは覚ええない。あの女達にはハナから期待なんぞしていないからだ。揃いも揃って、ああいう品のない女を選んで、母親を失望させた情けない息子らに怒ったのだったが…。

「でもねえ、そういう男に育てちゃったのはあたしだものね。あーあ、可愛かったのに、どうしてあんな馬鹿になったんだろうねえ」

家まであと少しだ。数件の空き家の前を通り過ぎる時、春美さんはいつも寂しくなる。このお宅には去年まで人が住んでいた。あそこの家も、うちの子の同級生のかっちゃんがいた。だけど、ずいぶん前から空き家になって、屋根も庭も荒れて草茫茫だ。小勝山団地は、かつては子供が沢山坂を走りまわっていたのに、今はあたしみたいな年寄りばかりの団地になってしまったなあ、また溜め息が出た。

市原市には沢山の造成団地がある。小山や丘を切り拓いて段々状の住宅地を造成したところも多い。規模は大小様々だ。春美さんが住む小勝山団地と、隣接する光風台団地もそうだった。この小勝山団地は、田んぼの中のこじんまりした小山が段々状に削られていて、その中央をメイン通りが突っ切っている。そこから網目状に何本もの路地が交差しているという、わかりやすい形状だった。メイン通りが結構急坂で、春夏秋はよいものの、冬は少々問題があった。雪が降ったりすると、車で坂を走り来するのが困難になるのである。雪国ではないので、スタッドレスタイヤとかチェーンなどの備えに疎い者が多く、そもそも降るか降らないかわからない雪に備える意識が低かった。だから、この団地の麓には広い駐車場が存在していて、冬場に自宅まで車で上りきる自信がない者は、そこに駐車スペースを借りて、雪の日にはそこから徒歩で帰るといった方法をとる者も沢山いた。

春美さんの家は、麓から一番遠い区画にあった。夫が会社勤め

をしていた頃は、春美さんの家も、この麓の駐車場に一台分を確保していたものだ。でも夫が亡くなったのを機に、駐車場契約を解除して、車自体も処分した。何故なら、専ら運転は夫だけに任せてきた結果、春美さんは文字通りのペーパードライバーになってしまったので、車の運転にからきし自信がないのだった。コミュニティバスも通っているし、移動手段はあると自分に言い聞かせて、春美さんは夫との思い出の詰まった愛車を手放したのだった。運ばれていく愛車を見送った時には、思わず涙ぐみもしたが、でもあの車に女を乗せたこともあったのだろうと考えると、「手放してせいせいしたわ」とも思った。

時折、夫との楽しかった思い出と共に、裏切られた悔しさを思い出して苛々する時は、いつも仏壇の夫の位牌に向かって、叩きつけるように思い切りお鈴を鳴らしてやることにしている。幸か不幸か、自宅の周りは空き家ばかりなので、結構な音を出しても苦情が来る心配はないのだった。おはよう、あなた。カーン。バカバカ、カンカン。勝手に死んで、浮気までして、裏切者め、カンカンカン…。

さて、来し方を思い出しつつ歩いているうちに、春美さんは家に辿り着いていた。錆の浮いた扉を開けて、玄関ポーチに入ったところで、クウクウと鳩の鳴き声が耳に飛び込んできた。そっと覗くと、庭に置いた盆の中のパン屑を、二羽のキジバトがついばんでいた。

「来てる来てる」

なんとなく嬉しくなって、春美さんは急いで家の中に入った。

傷みややすい肉と魚をとりあえず冷蔵庫に入れて、紅茶入りのマグカップを手に、リビングの椅子に座った。ここからが一番よく庭が見えるのだった。鳩は、お互い何かを話し合っているかのようになり、ククルル、ククルウ：と鳴き合いながら、パン屑を拾うのに余念がない様子だった。

「可愛いねえ」と、春美さんが目を細めて呟いた時だった。けたたましい声と共に、鳩らが空中に飛び上がった。驚いて紅茶をむせながら見ると、何度か見かけたことのある黒猫が一匹、鳩たちに跳びかかったのだとわかった。鳩は危機一髪だったわりには余裕の体で、屋根の上にとまって、猫に向かってクウクウ鳴いた後、ケロリとした様子で飛んでいってしまった。

「またアンタなの？ 一体どの猫よ？」

春美さんがガラス戸を開けて怒鳴っても、猫はふてぶてしい顔で一瞥してからニャーオと鳴いた。片耳に桜の花弁のような切込みがある。地域猫なのだと言春美さんは理解した。野良猫を保護し、ワクチン接種や不妊手術を施した後、片耳に切込みを入れて元の場所に戻すというNPO法人的な組織があるから、この黒猫もその中の一匹なのだろう。だけど、地域猫と名前を変えても、野良猫であることには変わりがないのだ。腹を空かして鳩を狙ったのかと、春美さんは少し哀れに思ったが、しかしそれにしても目の前の猫はなかなか肉付きが良く、人馴れもしている風であった。すると、わりと近くから、「クロ、クロヤー」と、女性の声が聞こえてきた。それを聞くなり、黒猫はパッと身を翻して、声の方角へと走り去っていった。春美さんは、なんとということもな

く、猫の後を追ってみた。探すまでもなく、声がまた聞こえてきた。「クロヤ、たんとお食べ。今日はトリ皮も入れてあげたよ」

佐竹という表札がかかった家の前で、春美さんよりも少し年上と思しき女性が、しゃがみ込んであの黒猫に餌をやっていた。ウミヤウミヤと唸りながら、猫は山盛りのキャットフードを食べている。

春美さんは、女性に声をかけてみた。

「すみません、この猫ちゃん、お宅で飼ってるんですか？」

佐竹秋穂さんは、猫を撫でる手を止めて答えた。

「ええまあ。そんなものだけどうして？ クロが何かお宅に迷惑でもおかけしたのかしら？」

春美さんは少し戸惑った。野生の鳩に猫がチョツカイをかけるのは自然なことだし、別に自分が迷惑を被ったというわけでもないという理屈はわかっていたのだが、とりあえず世間話風に言ってみた。

「あたしはすぐその川辺という者ですけど、庭に小鳥がよくやって来るんです。特に鳩が。だけど、最近お宅の猫ちゃんが遊びに来ては鳩を追い払うんですよ。元気が良い猫ちゃんねえ」

すると、秋穂さんは「それはまあどうも申し訳ない、というべきなのかしら」と言いながら立ち上がり、そして、「でも、もうそういうことはさせませんと約束することは無理だわよ。猫の本能だから」と答えてきた。春美さんは、なんだか喧嘩を売られた気分になった。なので、「いいええ。でもね、飼ひ猫というのなら室内で飼って頂けたら有難いんですけど」と、精一杯丁寧と言っ

てみた。

フンという音が聞こえたような気がした。というか、確かに聞こえた。秋穂さんは、憐れむような表情で言った。

「アタシもそうしたいとは思うけどね、このコ、地域猫だったのよ。野良だった時間が長いから、アタシがいくら家の中に入れておいても、隙を見てすぐに脱走しちゃうの。つまりどうしようもないのよ。猫は鳥を追うものなんだし」

春美さんも、その理屈はわかる。でも、秋穂さんはそれだけに留まらずに反撃してきた。

「アタシも言わせて貰うけどね、最近やたらに鳩の糞がそこいらに落ちてるなあと思ってたけど、お宅が原因だったんだね。洗濯物にもくつつくし、ひとんちの猫に文句を言う前に、自分の鳩好きが引き起こしている迷惑をなんとかしてほしいわあ」

これには春美さんもカチンときた。そんなのは論理のすり替えじゃないかと思った。

「なによ、猫ばばあ」

口の中で呟いたつもりが、声に出していたのだろうか。

「じゃあ、そっちは鳩ばばあ」

あちらもしつかりと呟いてきた。聞かなかった振りをして、春美さんは踵を返して自宅に戻った。これが鳩ばばあの川辺春美さんと、猫ばばあの佐竹秋穂さんの出会いであった。何かの始まりを告げるように、団地森の蟬たちの合唱が、辺り一杯に響き渡っていた。

半月後、春美さんは早足で歩いていた。イッチニ、イッチニ、と、

自分を鼓舞するように声を出しながら。多少は日差しが和らいできたので、夏の間さぼっていたウォーキングを再開したのだった。要は散歩である。何かの本で、ただダラダラと歩くよりも、緩急をつけて歩くと効果的だと読んだので、時々思い出したように歩調を変える。周りを見つつ、独り言を言う。

「あらあ、もう秋明菊が咲いている。これ、好きなのよね。このお宅は、木蓮を切っちゃったんだ。勿体ないわねえ」等々。

他人様の庭の有様に、他愛もない感想を漏らしつつ歩くのは楽しかった。関わることはなくても、同じ団地内で生活している住人らとは、なんとなく連帯感を感じているので、彼らの生活の営みを身近に見ると、少し寂しさが紛れる気がするのだった。

散歩は思いがけない出会いももたらしたりする。春美さんが、次の角に辿り着こうとした時、視界をサツと黒い影が横切った。

「うん？」

この頃また目が悪くなってきたから、見間違いかとも思ったけれど、目を足下に落とすと、そこにクロがいた。何を思ったか、クロは春美さんの踝に体をこすりつけてきた。春美さんがしゃがみこんで、クロの喉と耳の後ろを搔いてやると、ゴロゴロと雷みたいな大きな音を立てて目を細めるのだった。

すると、秋穂さんが現れて、驚いたように言った。

「へええ、クロが懐くなんて珍しい。貴女、猫は嫌いなんじゃないかったの？」

前回少し失礼だったかなと反省していたので、春美さんは笑顔で応じた。

「とんでもない。猫、大好きですよ。でも鳥も好きなんです。動物全般、蛇はちよつと苦手だけど、生き物はなんでも好きですよ」

ねえ？ とクロに話しかけた。クロは、上機嫌で喉を鳴らし続けていた。ゴロゴロゴロ…。でも、秋穂さんがポケットから猫クッキーを取り出すと、パッと春美さんから離れて、今度は秋穂さんの足にまとわりついた。「現金だねえ」と、二人の声がハモツた。

「実はアタシもね、猫も好きだけど鳥も結構好きなのよ」

秋穂さんが、宣言するかのよう胸を張って言った。

「なあんだ、じゃあ、あたし達、動物好き同士なんですわね」

「アタシは花も好きだよ」

「あたしですよ。今度庭を見に来て下さいよ」

秋穂さんも笑顔になった。目尻の皺が可愛くて、昔はこの人美人だったんだろうなあと思える笑顔だった。

「いいわね。でもあんた、なんで敬語使ってるの？」

「だって、お宅は一応目上でしょ？ 私はまだ七十七歳ですし」

「あっそう。確かにアタシの方が十近く上だね。でも、敬語は抜きで話そうじゃないの」

「じゃあ、そういうことで」

会話がポンポン飛び交った。二人共に、思った事は腹藏なく口に出すし、根に持つタイプではなかったため、最初の印象と百八十度異なり、結構ウマが合うという気がしてきた。話し相手ができるのは、どちらも大歓迎だったのであった。

次の日、早速秋穂さんが春美さんの家にやってきた。

「ほーい、鳩さん。お茶菓子持参で来たわよ」

ということは、お茶を出せということだ。春美さんは、久々にお気に入りのペアカップを取り出して、「また出番が来たよ」と囁いた。ディンブラーの葉が開くのを待つ間に、秋穂さんは手提げ袋から、バウムクーヘンと豆大福を出してテーブルに並べた。

「鳩さんの好みが変わらないから、和菓子洋菓子、両方持ってきたわよ」

春美さんの秋穂さんに対する好感度が一気に上がった。バウムクーヘンも大福も、名の通った老舗の菓子だった。口にするのは久しぶりだった。

「ありがとう、猫さん。どっちも大好きなんだけど、なかなか買っていく機会がなくてねえ。ずつと食べたかったのよ」

すると、秋穂さんは呆れたようにこう言った。

「は？ わざわざ買いになんて、アタシだって行けないよ。鳩さんは、ネットのお取り寄せとかを知らないの？」

春美さんも、ネットショッピングの存在くらいは知っていたけれど、自分で利用したことは今までなかった。以前一度だけ、チラシに載っていた化粧品を注文しようとしたことがあったのだけれど、会員登録だのパスワードだの、とにかく面倒臭くて、まごついているうちに画面が勝手に閉じてしまって、とうとう途中で諦めてしまった。それ以来、ネットで買いたい物を試みたことはなかった。

「だって、別に必要ないもの」

春美さんが言うと、秋穂さんは再び「は？」と言った。

「必要ないって、何言ってるのよ鳩さん。アタシらみたいな環境

にいる婆さんこそ、ネットショッピングが必要な買い物弱者なんじゃないの」

秋穂さんは、バウムクーヘンを切り分けている春美さんに向かって、ネットの利便性について滔々と説明した。

「車なしでは買い物にも行けないけれど、この団地の坂は急だから、アタシみたいに運転が下手だと怖いよ。人身事故さえ起こさなかったけど、何度も車体を擦っちゃって、結局車は廃車にして免許も返納したの。でも買い物が不便になったから、頑張っってネットを勉強したわけよ。メカはホント苦手でさあ、最初は何一つわからなかった。ストレスだったよ。でもやるしかないから頑張った。ヒトに頼りたくなかったし、何よりも子供らに頼りたくなかったのよ。今じゃ、このトシにしてはなかなかのネット通になったと思う。この菓子だって、ネットで注文したんだよ」

猫さんは努力家なのだあと、春美さんは本心から思った。目の前の障壁に愚痴をこぼすものの、何ら現状打破の努力をしなかった自分と違って、この人は、ちゃんと対策を立てて苦手なメカにも挑戦して克服したのだ。もうトシだから、なんて言い訳をして逃げたりしなかったのだ。

春美さんは、思わず秋穂さんに頼んでいた。

「猫さん、お願い。うちにも主人のパソコンがあるのよ。あたしに使い方を教えてくれない？」

小鳥の餌のまとめ買い、ペットボトルの箱買いがしたかった。重たいワインも注文して、猫さんと一緒に飲んだりして…。

「いいよ。自己流だけど、日常生活が快適になるくらいのことな

ら教えてあげるよ」

こうして、春美さんと秋穂さんは、日毎に友情を深めていった。互いの家を行き来してお茶を一緒に飲んだり、得意料理を差し入れし合ったり、適度な距離を保ちつつの付き合いを続けていた。二人共それなりに人間関係のトラブルは大抵が距離感の測り方の誤りから生じるという事実を体験していたので、友人が出来たからといって、舞い上がった結果、ベツタリと相手に依存するような愚行を犯さずに済んだのだった。「親しき中にも礼儀あり」を自然と実践できているのは、やはり年の功というものであったろう。

春美さんの買い物弱者問題は、秋穂さんの助けを借りてほぼほぼ解決した。負担に感じる買い物は、宅配をフルに活用して、日々の買い物が増え負担にならない程度になると、買い物が増えなくなった。長いこと誰も訪れることがなかった家に、元氣いっぱい若いコが、「お届け物です！」とちよくちよくダンボール箱を抱えて来てくれるようになると、なんだか空気が明るくなる気がした。一つできることが増えると、秋穂さんは、すごいすごいと褒めてくれた。それが嬉しくて、久しぶりに生きるのが楽しいと思っている自分に気づく春美さんであった。

春美さんは、つくづく不思議に思うのだった。こんな機械がどうして世界のどこにでも繋がっていきけるのだろうか。世界中の情報が、望む望まないに関わらず、いきなりワツと入ってくる。こんなすごい物をどうやって作れたのだろうか。どういう仕組みになっているのだろうか。まあ、車にしたって、別に構想理論を知っ

て運転していたわけではない。最低限操作ができればそれで良いのだけれど。それにしても、八十の齢を目の前にして、自分が如何に無知蒙昧であったかと、春美さんは改めて自覚した。春美さんはふと腑に落ちた。猫さんが恰好良いのは、いつも自分で考えて生きているからだ、と。ネットは便利だけど、情報の取捨選択ができるくらいの聡明さと問題意識を自分も持ちたい、と。

そんなある日のこと、秋穂さんから電話がかかってきた。直接訪問せずに電話とは珍しいと思っていると、秋穂さんはこう言った。

「あのね、鳩さん。大したことでもないけど、この頃アタシ、膝とかいろんな所が痛くてさあ。寒くなってきたし、大事をとって明日から冬の間は、当分散歩を休もうと思っているんだけど」

「あらあら、大丈夫？ それじゃ、あたしも休もうかな」
すると、秋穂さんはびしゃりと言った。

「それはダメ。アタシみたいにならない為に、あんたはちゃんと続けなさい。あんたくらいの時から怠けないで動いていればよかったです、最近つくづく思ってるのよ。あんたはまだ間に合うんだから、一人でもしっかりと歩きなさいよ」

やれやれ、勝手な猫さんだと思いがら、それでも「お大事に」と言って、春美さんは電話を切った。

電話から一週間経ったが、秋穂さんとの接触は途絶えたままだった。お互いにべたべたした付き合いは嫌いだから、春美さんも特に気にはいかなかったけれど、流石に二週間が過ぎたあたりから、ちよつとご無沙汰過ぎないかと気になってきた。そこで

電話をかけてみたが、何度コールをしても繋がらなかった。「なんだ、いないのか。出かける元気があんなら良いけど。それにしても、猫さん、ちよつと薄情なんじゃない？」

電話を切ってリビングに戻ると、庭先から、ニィ〜と聞きなれた鳴き声が聞こえた。クロだった。春美さんの顔を見ると、クロはカリカリとガラス戸を引つ掻いて、訴えるように鳴き続けた。「どうしたの、クロ。なんか痩せた？ お腹空いてるのかい？」

春美さんの家にも、今ではクロの為のキャットフードが置いてある。それを手近な皿に入れて出すと、クロはウミヤウミヤという声をあげて、すぐに平らげてしまった。

「猫ちゃんは、あんたのご主人はどうしたの？ 何かあったの？」
クロはただ、ゴロゴロと頭を擦り付けてくるばかりだった。

その日から、クロは殆ど春美さんの家で過ごすようになった。秋穂さんの家に様子を見にいつても、いつも人の気配がせず、玄関のチャイムが虚しく響くだけだった。春美さんは、リビングの隅に置いた座布団の上で、以前からこの家の猫みたいに寛いでいるクロを撫でながら、「あんたのご主人、入院でもしてるのかな？」と、話しかけることしか出来なかった。

また数日後のことである。いつものように猫さんの家の前に来ると、見慣れないワゴン車が停まっていた。そして、家の中から、五十代くらいの女性が、大きな手提げ袋を両手に持って出てくるのに出くわした。春美さんは、慌てて呼びかけた。

「すみません、猫…いえ、秋穂さんのお身内の方ですか？ あたし、彼女の友人なんですけど、彼女に何かあったのですか？」

女性は、「ああ、貴女が鳩さんですか」と、荷物を車に置いて、春美さんの近くに来た。そして、お辞儀と共に、

「母が大変お世話になったようで、ありがとうございました」と言った。春美さんは、女性の物言いが過去形であるのが気になった。

「母は、半月ほど前に、凍結した道路で転んで入院したのです。肋骨を折った程度でしたが、まあトシがトシなので、うちの近くの病院に入院させました」

春美さんは、秋穂さんが電話してきたのは多分病院からだったのだろうと想像した。じきに退院して、帰ってくるつもりだったのだろうと、何故か確信しつつ聞いた。

「じゃあ、もう退院はできたのですよね？ 秋穂さん、いつこちらに戻られるのですか？」

娘さんは、首を横に振って答えた。

「いいえ、もうこちらの家には戻そうとは思っていません。常々、独り暮らしは心配だから施設に入るように勧めていたのですけど、母はご存知のように、何せ頑固者なもので。でも、今回こんなことになったのを機に、主人や妹夫婦とも話し合った結果、病院からそのまま施設に入所させる手配をして、一昨日からこちらに移しました。今日は着替えを取りにきただけです。母は貴女のことを気にしていたから、お会いできて良かったんです。そういうわけなので、本当に今までお世話になりました」

春美さんは、体の力が一気に抜けるような気がした。秋穂さんの娘さんは、急いでいますので、と、すぐ車に乗って行ってしまっ

た。春美さんは、呆然とその場に立ち尽くしていた。足下に何か当たったので見ると、クロがいた。春美さんは寂しく微笑んでクロを撫でて言った。

「クロ、あんたもあたしと一緒にだね。こんなに突然置いてきぼりなんて、酷いよねえ、猫さんは」

ナア／＼と、クロは合槌を打つように長く鳴いた。その日から、クロは春美さんの家の猫になった。

秋穂さんという友が欠けた寂しさを、クロと庭に来る鳩たちに癒されながら、春美さんは淡々と日々を過ごしていった。ネットサーフィンも、前ほど面白いと思えなくなった。あと、やたらと独り言が増えた。この猫さん欠乏症は治るのかしら。どうしてこんなにつまらないんだろう。やっていることは変わらないのに、正直寂しい。口に出したくなかったのに、本当に寂しい。やあだ、あたしったら、結構無理していたのかもしれない。ダンナがいなくなつてから、本当はずつと寂しかったんだ。ダンナが最後の方は喧嘩ばかりだったけど、それでも側にいてくれる大事な人だった。後で浮気していたってわかって、綺麗な思い出に泥を塗られた気分だったけど。そんな中、猫さんと知り合えて、本当に本当に嬉しかったのに、こんなに急にいなくなっちゃって、知り合う前よりもずつと寂しくなっちゃったじゃないの。これなら知り合わなければよかったよ。あたしだけじゃなくて、クロまで簡単に捨てちゃうなんて、無責任にも程があるでしょ。ひどいなんてもんじゃないよ。アホ、アンポンタン、冷酷女。自分だけ、

ぬくぬくと施設暮らししてボケてしまえ！ ついつい虚しく罵倒するのだった。

それからまた二カ月近くが経った。春美さんの家の庭の梅が綻んで、春の始まりを馥郁と告げ出したある朝だった。春美さんは、クロにキヤットフードを与え、庭に小鳥の餌を撒いてから、すっかり習慣となった朝のウォーキングに出かけた。一時は気が抜けてしまつて、もう止めようかと思つた習慣だった。でも、秋穂さんなんかいなくても自分は平気と言ひ聞かせ、半ば意地で続けていた。習慣になると、悪天候で歩けなかつた日などは体調が優れない気がするくらいで、やはり継続することが大切なのだなあと実感している。

大通りに出ると、始発のコミュニティバスが丁度走り去るところだった。停留所に、見慣れた小柄な姿を認めて、春美さんは息を呑んだ。あちらも春美さんに気がついて、ゆつくりと片手を頭上にあげて振りながら叫んだ。

「ほーい、鳩さあん。会いたかつたよー」

猫さんだ、秋穂さんだ！ 春美さんは、怒つたように言った。

「…猫さん、あんた…、なんでここに居るのよ！ 施設に入ったんでしょつ？」

やつとそれだけ言つて、次の瞬間、秋穂さん目指して坂を駆け下つた。

「危ないよ、転ぶ転ぶ！」

秋穂さんが叫んだ瞬間、脚がもつれて、春美さんは前のめりに倒れかけた。間一髪で、秋穂さんが腕を掴んで転倒を防いでくれ

た。セーターに食い込んだ爪が痛かつたけれど、少しも苦にならなかつた。猫さんが、猫さんが帰つてきたのなもの！

せっかちな性分の春美さんは、秋穂さんにもう一度施設のことを尋ねた。もしかしたら、これは一時帰宅というやつで、秋穂さんがすぐにまたいなくなつてしまふかもしれないと思つて不安だつたのだ。すると、秋穂さんは、ケラケラと笑つて言い放つた。

「あんなどこ、さんざん問題行動を起こしてやつて、おん出てきてやつたわよ。スタッフの言うことは聞かない、勝手に脱走する、とにかく施設側には悪かつたけど、アタシが納得づくで入つた所じゃないし、一日も早く出たかつたからね。娘たちはもうカンカンで、今後アタシの面倒は看ないつてさ。いつ面倒見てくれつて頼んだのさつて、そりやもう大喧嘩」

春美さんは、その修羅場を想像して、ちよつと可笑しくなつた。

「ええと、そりやあ大変だつたねえ」

「うん。でもまあ、スカツとしたわ。アタシは、完全にボケない限りは、自分の最期は自分で決めたいのよ」

春美さんも、「あたしもだよ」と頷いた。秋穂さんはやつぱり恰好いと思ひながら。

「まずはあたしの家でお茶でも飲もうよ。疲れたでしょ。荷物持つてあげる。そいで、落ち着いたら、これからの終活のことを、一緒にじっくり考えようよ。行こう、クロも待つてるよ」

秋穂さんの顔が、パツと明るくなつた。

「クロのこと気になつていてさ、娘たちに何度も言つたのに全然相手にしてくれなくて。あんたが面倒みてくれるだろうなあと

は思っていたけど、良かった良かった。ありがとね」

春美さんは、この冬の間、すっかり美食家になって太ってしまったクロを見たら、秋穂さんに絶対に叱られるだろうなあと思いつつ、荷物を持って歩き出した。そう、今はまだ、こうして元気に歩いていける。これからもいろいろあるだろうけれど、まだ大丈夫だ。いつか訪れるその時まで、ずっと未来が続くのだから。

二人はゆっくりと、仲良く坂道を上っていった。

完